



通信

No. 58

2016年 初夏号

発行：子育てサポートくるみ

住所：羽曳野市壺井 508-1

TEL：072-957-3282

FAX：072-958-4089

HP：<http://kosodate-kurumi.com>

広がる子どもの育つ場

1970年7月に誕生したくるみ共同保育園は、今年で46年目を迎えます。古市小学校横の民家で産休明けの保育を始めました。その後、埼玉県深谷市にある「さくら・さくらんぼ保育園」と出会い、「0歳児から学童期までの保育をしたい」という保育者・父母の願いで白鳥3丁目に移転し、プレハブ園舎を作りました。さらに、子どもの育つ環境“自然豊かな地で、広いホールの園舎・思いきり走り回れる園庭のある保育園”を求めて、現在の場所・壺井の土地に出会い、1991年に念願の新園舎が完成しました。父母・職員・OBの想い、そして共に保育を学び合っている保育園仲間の「関西の拠点となる所を」という想いも込めた園舎です。

また、全国で「さくら・さくらんぼ保育」を学び、実践している保育園が集う全国保育実践交流会を立ち上げて20年になります。関西地域は富山・石川・福井(3ヶ園)・京都(3ヶ園)・大阪・奈良・和歌山・兵庫・岡山・広島(2府8県)と広い地域から集っており、学び合う園は14ヶ園あります。4月の園長会から始まり3月の年長合宿・卒園を祝う会に至るまでの学習・交流会の中で子どもたちは集団としての力をつけていきます。各園それぞれが独立した実践をしながらも、交流し合う中でお互いの実践から学ぶことを続けてきています。立ち上げた頃の関西地域の各園は、無認可の共同保育園として運営し、地域でコツコツと保育を積み重ねている園が多くありました。この20年で、環境や保育を求める入園者があり、園児が増えて認可園として運営する園が増えてきています。また、近い地域での交流も盛んになり、北陸(5ヶ園)・近畿(4ヶ園)・中国(3ヶ園)で集まり、リズムや合宿保育を行っています。福井県三国ひかり保育園は、北陸の拠点となる広いホールのある新園舎を建築し5年目となります。合宿保育(9月・3月)は長年くるみを会場としてきましたが、各園が地域の交流で学びを重ね、子ども達や親たちの負担(長距離移動など)もできるだけ小さくしようと、卒園期には2ヶ所【北陸-5ヶ園(三国ひかり)・近畿-7ヶ園(くるみ)】に分かれて、それぞれ約80名の年長児が合宿し、祝う会を行うことができました。このことは、子どもの育つ環境を求め創る園が根つき、保育が広がっていると実感でき、本当に嬉しいことです。くるみも現在では、保育園児50数名・児童発達支援10名・学童児30数名の子ども達が日々生活し、仲間と共に各年齢の様々な豊かな経験をし、育ち合っている園となっています。

15年度の卒園式では、8名の年長児が小学校へ、そして0歳児から12年間くるみで育った2名の6年生が中学校へと巣立っていきました。

「どの子ども育つ」保育と環境を求め続けて、この地に深く根をはっていき「明日を拓く」ことになると信じ、大人たちが力を合わせて進んでいきたいと思えます。

園長 山田 房江

6歳と集団

15年度の年長児は8名でした。年長になると、他園との合宿・交流保育があります。合宿保育とは3泊4日の間、家から離れて保育園で他園の仲間と共に生活をします。今年度は7回の合宿を経験しました。春は奈良公園の原生林の中を歩く、夏は福井県の海、秋の運動会合宿では100人余りの仲間とリズムや障がい物に挑戦し、また岡山県の大自然の山の中で身体を使いきる、冬はクリスマスのものでづくりや石川県でスキー体験、そして最後は、卒園前に大勢の仲間とのリズム合宿をしました。初めは不安そうな子ども達も、回数を重ねるうちに合宿が楽しくなります。たくさん大人に褒めてもらい、時には厳しい要求を受けたりもしますが、他園の友達とたくさん出会い、“仲間と一緒に楽しい！”“仲間のできることは自分もできるようになりたい！”“もっとステキになりたい！”という気持ちが育っていきました。

また、くるみでは年長の取り組みの1つにコマ回しがあります。クリスマスにサンタさんから投げコマのプレゼントをもらいます。年長はお正月明けから、全員で連続10回コマを回すことに挑戦し、回せると白木の大きいコマに、自分で絵を描き、「世界に1つしかないコマ」を作ります。みんな気持ちを一つにしないと10回は回りません。目と目を合わせ、“コマコマ回れ！”とかけ声をかけて回す、がなかなかできず、8名はとても苦労



[わしさん全員でコマ回し!]

しました。何回も何回も挑戦。でも達成できない。どうしたら回せるか話し合いを繰り返し、泣いたり、怒ったり、励ましたり、助けたり…。そして、みんなの気持ちが1つになり、挑戦をやり切ったのです！貴重な体験でした。

この1年、子ども達はたくさんの人との出会いの中で、自分の主張ばかりではなく、友だちと相談し力を合わせていくこと、あきらめずに挑戦する力をつけてきました。そして、自分の力を出し切るには気持ちが前向きであることが大事で、子ども達がより心地よく充実した生活が送れるように、保育者も保護者も、力を合わせて、応援し、最善を尽くすことが大切だと感じました。

さくら・さくらんぼ保育園の創設者である齊藤公子氏が書いた『齊藤公子の保育論』の中にある、『六歳は、もう現代のヒトの脳に近いわけですから、自分で見て、考えて、行動する、自分の欲望もみんなのためにおさえられる集団の中の一員としての自分を考えてゆくことができる—中略—“万人は一人のために、一人は万人のために”という考えです。そして自治の能力を養ってゆくのです。自分だけよければ、ではなくて、みんなと共同できる、そして自分より弱いものを自らの意志で助けることのできる、またお互いに規律を生み出してまもる集団の中にあってこそ、子どもは伸びる...』という言葉を実感できた一年でした。

保育士 紅露 とも子

保護者の声

○ わし親の一年を振り返って（小川 晃裕）

卒園から早一か月。原稿依頼を受けて一か月。そのうちにそのうちにと思っているうちに、締め切りの四月末がやってきてしまいました。

わし親の一年を振り返ってということですが、卒園直後は「本当に疲れた一年だった」というのが率直な感想でした。しかし、翔平が小学校に入学して一か月が過ぎた今思うことは、「しんどかった分、得たものは多かった」ということです。

わし親の生活で最もしんどかった事は、何と言っても合宿です。私はほとんどお手伝いに参加出来ませんでした。職場が変わりたての嫁さんが、何とか仕事をやりくりしてお手伝いに参加してくれました。嫁さんが頑張ってくれた分、私は家で航平の面倒を見ていましたが、どちらにしても、仕事のやりくりは必要でした。時には、子ども達を寝かしつけた後、職場に戻って深夜まで残務を処理した事もありました。合宿前から合宿終了までは、体力と精神力を限界まで使ったように思います。

それと、カレンダーの活動もなかなかでした。私個人の考えは入園当初と変わらず、「買い取り、寄付」です。そんな人間がみなさんのまとめ役の立場にまわるなんて…これは私自身の考え方を変えられなかった事によるしんどさでした。

ここまでを読むと、「おいおい、文句ばかりで、良い事は何も書いてないじゃないか！」と思われるかもしれませんが、安心して下さい、良い事ありますよ。わしの一年で私が一番嬉しかったのは、翔平がスキーを滑れるようになった事です。出不精な私ですが、嬉しくて、スキー合宿の翌週に家族でスキーに行ってきました。子どもが変われば親も変わる。まさにそういう出来事でした。そして、次に嬉しかった事は、何だかよく分からない場面で「自覚」が芽生えた事です。「わしさんなら…」という魔法の言葉で、自分から進んで物事に取り組めるようになりました。小学校生活でも、自分で考えて動こうとする姿が見られるのは、わしの一年で頑張った事の延長上にあるものではないかと思っています。そして三つめ。学童の懇談でも言ったのですが、「友達になろう」と、自分から声をかけられるようになった事です。翔平は、ああ見えてかなり内気な子どもです。私に似て、自分から声をかけるのはとても苦手でした。しかし、合宿を終える度に、「〇〇と友達になってん！」と嬉しそうに話す姿が、今の小学校生活につながっていると思います。

子育てにおいて、本当に大切なことを伝え続けて下さった職員の方々には、感謝の気持ちでいっぱいです。親が子によって、親にならせてくれた数々の出

来事。どんなことも必要あったこと。その瞬間（とき）、その瞬間をよりよく生きるため、親も考えさせられたとても素敵な一年でした。

○ わし親の一年をふりかえって・・・（佐々木 真紀子）

新しい生活を築こうと結衣・美和・父（も？）と必死で頑張っている今、できれば過去は振り返らずにいきたいところです。

私の頭から離れない言葉を中心に説明・補足しながらお伝えします。

「何言うてんの？お母ちゃん。集団やで」と保育士より

「結衣がお楽しみ会の時に、低学年の中でリーダーシップを発揮していた」と学童の担任が私に伝えてくれました。嬉しくてつい冗談ぽく「その結衣を育てたのは（母親の）私ですか？」と聞いた時に返ってきた言葉です。結衣を育てたのは現三年生のくるみの仲間です。学童さんという集団です。そして、それを取り巻く親集団です。

結衣は2歳半でくるみに入園した瞬間から急激に輝きだしました。それまでの母と結衣だけの苦しく狭い世界から解き放たれました。当時、色んな事情で母に余裕がなく・・・でも結衣は十分満たされていました。くるみの園庭。たくさんの遊び仲間。仲間の延長のような職員さん・・・。母ちゃんに代わって、くるみのお仕事を頑張る父ちゃん。わが子のように見守ってくれるくるみの母ちゃん父ちゃん、ばあちゃんじいちゃん・・・。度々あずかってくれて、インドア派の佐々木家にはなかったバーベキュー文化を結衣に味わわせてくれる世帯もあり、泊まった時には父ちゃんが当たり前のようにおねしょ布団を干してくれました。また、自前の苺畑で子どもに摘みながら苺を食べさせてくれる世帯もありました。

そう。結衣、もちろん美和も育てたのは、くるみという集団です。くるみという共同体です！！

「佐々木さん、逃げちゃダメー！！」と年長の親より

結衣が年長の時のわし親は、13世帯。そのうち育休組がいたり、情に厚く男気とバイタリティーにあふれている方、心強い年長経験者、けなげに頑張る初めての年長者とみんなが熱くなっていたように思います。みんなが集う素敵な場として自宅を提供してくれる世帯もありました。

結衣の年長の時は、私はぬるま湯につかってました。当時の体調の悪さもあつたのですが、多少こっそり隠れていてもすべてが滞りなく進行したのです。

でも、美和の年長の時は、様相が異なりました。世帯数8。猛烈に外で働く母

ちゃんたちばかりだったのです。その中で、力強くリーダーシップを発揮し、時には嫌われ役も引き受けながら前進する1人の母ちゃんの姿に圧倒されました。きわめつけは、運動会直前に「わし親で、リレーして一致団結しよ！！」なんて悪い冗談いう人やろう・・・と思っていたら、別の母ちゃんと一緒に、朝の送りの時にとり囲み、「走ろう！佐々木さん！」「絶対嫌！」という私に返ってきたのがこの言葉です。「私逃げてないし！わし親の仕事、まあまあ頑張ってるし！」と子どものケンカみたいになりました。

ひたすら優しくあった結衣の年長の時のわし親。でも、今回の美和のわし親母ちゃんたちには、さりげなく隠れようとしてもひきずりだされ・・・、鍛えていただきました。

「個人プレーは、得意けども、みんなで一つの事をやるのは苦手・・・。」

年長担任が、美和たち年長さんについて文集で書いた言葉です。そのままズバリ、私たち年長の親たちの事ですね。

「もめちゃだめなの？」 と園長より

「親がもめる前に、もっと園として介入してください！」と私が園長にお願いした時に返ってきたのが、この言葉。

あ～そうか・・・。「もめる→ケンカする→本音ぶつけあう」これも、わし親の影の課題として設定されてたんや～。靴下編む課題に必死になって気づかなかった～。

でももっと言うならば、「自分の言いたいことを言う。する。」だけでも不完全で、「自分さえ我慢すればいい」という自己犠牲も違う。「私、ここまでのからこれして。私、これは苦手だから、そこは助けて」などと一歩前に踏み込んで、交渉することがもっと大事だったな・・・とこの一年を振り返っての反省です。（広木講演の課題図書「幼児期」岡本夏木著 参照。私って「幼児期」の課題をクリアしてなかったんですね・・・。「育ち直し」します！）でも、限られた時間の中、コミュニケーションはかるの自体が難しいですが・・・。

そして、わし親になる前に、カレンダー活d oは行っておくことをお勧めします・・・。

いろいろあったけど・・・、くるみの保育の事、今の日本の社会情勢について・・・熱く語りあえる母ちゃんがいるということも初めてわかったし、そこは楽しかった！個性強烈な母ちゃん多かったくるみ保育園・・・。

まとまってなくてすいません。いろいろありがとうございます。

また、結衣と美和の反抗期の時に、駆け込んできたらよろしくお願いします。

○ 優のこと （吉永 紀子）

くるみで12年間を過ごした優の事について、学童期の事を中心に書きます。

本当にくるみ学童がなかったら優はどうなっていたのだろうか、と大袈裟な表現ではなく、切実にそう感じています。内向的で、ゆっくりの優は、小学校に馴染むのにはとても時間がかかりました。6年かかったと言っても過言ではないかと思います。1年生、3年生、4年生、5年生の4月は、3週間から1ヶ月お休みしていました。理由は、お友達の心無い言葉に傷ついたり、勉強のスピードについていけなかったり、担任との関係などなどでした。そんな中でも「くるみは行く」とくるみは大好きでした。ところがくるみは高学年になると“班長”というリーダー役がまわってきます。その時はさすがに「班長はやりたくない」と少しくるみに行くのをためらいました。「いろんなリーダーがいても良いんやで。前面に立たなくて、縁の下の力持ちリーダーもありやで」という話を優とした記憶があります。

そんな優も6年生の夏休み頃から変わってきたように思います。5年生の広島平和学習で貞子像前の折り鶴の数に驚き、平和を願う人が世界中にたくさんいる事を知り、6年の沖縄平和学習には絶対に千羽鶴を持って行きたいと決めたとようでした。6年の夏休み前になると、学童の皆に折り鶴を手伝ってとお願いし、その輪が学童だけではなく、学校のクラスの子、またその友達にも広がりました。毎日、毎日、優へ届けられるたくさんの折り鶴を大事に保管しながら「たくさんの方が折り鶴作ってくれる。嬉しい」と気持ちを母に話してくれました。結局、糸通しは宮岡さんがしてくれましたが、沖縄に行く5、6年の皆で折り鶴に平和への願いを書いた短冊をつけて沖縄戦で一番たくさんの方が亡くなった鎮魂の塔に捧げてきました。自分のやりたい事を皆に伝えて行動にしていくなかに優の姿に12年間のくるみ生活で培ってきた自治の力を感じました。

現在、優は吹奏楽部に入り、担当楽器はチューバに決まり中学校生活を楽しんでいます。「チューバはケーキで言うとスポンジのような物。演奏の土台やねん。」優らしいなと思います。くるみの思春期までを見通した12年間の保育で“自分らしさ”を大切に出来る子どもに育ててくれたとくるみの大人達、親集団、くるみを支え続けてくれているOBさん達やそして共に育ってきた学童集団に本当に感謝しています。